

今日のみ言葉 221 「主の栄光のからだと同じ姿に」 2012. 11. 20

キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、
私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださる。

(フィリピ信徒への手紙3の21)

He will change our lowly body to be like his glorious body,
by the power which enables him even to subject all things to himself.

私たちは、最終的にどのような存在になるのか、それがここではっきりと言われている。私たちは、死んで無になるのではなく、またさまよう霊になるのでもなく、罪ふかく、卑しい、低められた状態—苦しみと悩みに満ちた(*)存在でしかないにもかかわらず、最終的にはキリストの栄光のからだと同じ姿に変えてくださる、という。

(*) 上記の新共同訳などでは、「卑しい」と訳されているが、原語は タペイノーシス tapeinosis で、「低くされること」で、ヤコブ書1の10には実際にこの語は「低くされた」ことを喜べ、とその意味で訳されている。なお旧約聖書のギリシャ語訳では、この語はほとんど「苦しみ、悩み、貧しさ」などと訳されていて、苦しみ悩みにうちひしがれた状態としての低さを指す言葉として用いられている。例えば「私の悩みと労苦を見て…」詩篇25の18では、悩みと訳されている。

これが、神が私たちの前途に約束してくださっていることである。これは、何というすばらしい恵みであろう。年老いてだんだん体力もなくなり、体はあちこち動かなくなり、知的にも衰えていく。病気が重くなるとき、私たちの前途は薄暗いものになって、漠然とした不安や恐れがつきまとうようになる。そのような病気や老化で、衰えてみすぼらしくなっていく私たち人間の姿が、なんと、神と同じであるキリストの栄光と同じ姿に変えられるという。キリストは愛や真実で満ちており、しかもそれは永遠に変わらない本質であり、そうしたあらゆるよきものをもっておられる。それがキリストの栄光である。そのようなものを私たちも持つようになるというのである。

しかもそのためには、ただ信じるだけでよい、どんなに汚れたもの、罪深いものであっても、その罪を知り、そこから主を仰いで赦しを乞うだけでいい。これは、多くの日本人の宗教的習慣となっていること—死者の霊を落ちつかせ、慰めて現世の者にたたって来ないようにと、死者に食物や儀式で供養をするという発想とは根本的に異なったものである。

聖書で記されている神は、無から有を生み出される神、そして愛の神であるゆえに、私たちはこのようなことをも信じることができるのである。

そして、地上にある間からすでに、信じるだけでこのキリストの栄光を部分的に受け続けていくことができるのは次のようなキリストの言葉からも約束されている。

「心の貧しきものは幸いだ、神の国はそのひとのものだからである。」(マタイ福音書5の2)。

神の国とは、神の栄光に満ちた霊的な世界である。いかなる悪の支配をも存在しない完全な真実や愛の御支配にある状態である。

それをただ、心に高ぶりや自分中心などさまざまの罪があるのを知り、それを赦していただいて感謝する者—心貧しきものであるというだけでいただけるのである。

私たちの最終的な死において与えられるそのような栄光であるが、この現実の世においても、「神のちあふれる豊かさの中から、恵みのうえに、さらに恵みを受けた」(ヨハネ1の16)と記されているように、信じるだけですでに神とキリストの栄光を受けて歩めることが約束されている。



これは、わが家のもので、もうかなり以前から毎年咲いています。大きいものは20センチにもなる葉（ここには上部の小さい葉しか写っていないですが）をつけ、9月から10月にかけて、淡紅色の花をうつむきがちに咲かせる花です。

この花の学名は、ベゴニア・グランディス *Begonia grandis* といって、大きいベゴニア という意味です。ベゴニアにはいろいろなものが店頭にありますが、これはベゴニア

とは言われていないのは、江戸時代の始め頃から中国から伝わり、中国名をそのまま取り入れて親しまれていることからです。

たしかに、花屋で見かけるベゴニアの仲間とは、雰囲気のことなる花です。一般のベゴニアは太陽の光のもとで、公園や家庭で 周辺を明るく飾る花として いろいろなものが見られますが、このシュウカイドウは、日影や湿ったところに咲くもので、花もこのように、落ちついた控えめな雰囲気を漂わせています。

わが家のものも、側の苔むした古い水槽（金魚を飼育）のかたわらの湿ったところで毎年咲いています。

県南の山間部の日影の樹林帯で、この花が斜面一面に咲いているところがありますし、かつて京都北山の水がしたたり落ちているような樹林帯でも野生化したものを見たことがあります。

葉というのはほとんどが左右対称なのに、この花は左右非対称という意外な性質をもっています。このようなことはほんの一例で、数知れない植物たちは、花も葉もそれぞれに異なる色や形をもっていて、独自の個性を表しています。

神はその創造された一つ一つをそれぞれの個性をもったものとして地上に分布させています。日当たりのよいところで育つ植物が多数を占めるなか、日影や湿ったところに好んで生育するこのシュウカイドウのような花、あるいは苔のような地味な植物、花も咲かないが、地上に現れて4億年という長い歴史のあるシダ類、あるいは、イスラエルの死海沿岸のようなほとんど水分もない砂漠地帯でも育つアカシア、冬には氷雪に埋まるような厳しい環境で美しい花を咲かせる高山植物等々、千差万別です。

そしてそれらは、その形や花などによって神を讃美していると実感できるものが多いのですが、人間の場合は、さまざまの罪を犯す存在であり、神を讃美するように変えられるには、神の力を受けることが必要なことを思います。

沈黙のなかから、植物はさまざまのことを人間に語りかけています。

(文・写真ともT. YOSHIMURA)